

著者
森本あんり

アメリカキリスト教史



森本あんり著 新教出版社
1785円税込
四六判

現代の我が国における思想、文化、教育、経済など社会生活にかかわる多くの事柄に最も影響を与えている国の一つがアメリカだろう。1859年に日本が鎖国政策を解いて以来、様々なものが流入してきた。アメリカナイズということばがファッションや考え方の先端性を示す意味で長く使われていたのも事実である。しかし、最近はそのことば自体死語といえる。使われるときはむしろ負の要素で使われるのかもしれない。

そのアメリカの文化、思想に大きな影響を与えてきたのがキリスト教である。アメリカ文化の影響を色濃く受けてきた我が国は間接的にキリスト教の影響を受けてきたとも言える。

多くの日本人はキリスト教イコールアメリカの宗教というイメージではないだろうか。むしろキリスト教はアメリカ独自の宗教ではないが、今でもアメリカは世界的キリスト教大国といえる。プロテスタントが優勢であるという事実も特殊である。ヨーロッパからの移民の多くが教派的背景をもつてアメリカに渡ってきたが、時とともに彼らが社会的にも経済的にも政治的にも、そして宗教的にも本国から分離自立し、独立していく。その過程に信仰覚醒運動が繰り返され、アメリカの教会、アメリカのキリスト教が形作られていった。そのような背景をもつた、「アメリカ経由のキリスト教」が日本に持ち込まれたわけである。

21世紀の伝道ということばがよく使われるが、日本の教会のこれからの考えの上で、私たちの教会のもっている政治、行政、習慣を検証することが必要ではないだろうか。アメリカのキリスト教からの遺産をもう一度整理する時に来ているといえる。その意味で本書は、私たちが明日の教会を模索する上で、わかりやすい資料となるだろう。

15世紀の初期の入植から、現代に至るまでが12章にコンパクトにまとめられ、駆け足でアメリカのキリスト教史を追っているが、まずは必要十分な内容と言えよう。さらなる資料に触れたければ、巻末の文献案内が役に立つだろう。

(評・中野晶正=クリスチャン新聞編集長)